WASON
HQ
1104
J74

Sept. 25
1885
no. 5

驛遞局認可

明治十八年九月二十五日發行

女學雜誌

第五號

東京萬春堂

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

五常の歌　（智）　道しある世にうまれなばおのづからひとつを知らば十をしらなん

●女學雜誌第五號目次

宮内省達、華族女學校規則●婦人の地位（下）●雜報數件●和歌四首、發句二、詩二首●梅香女史の傳（第四）●今様、秋夕、本邦の文がたり、内外の混語、詩歌を咏ずる容易ならず●古今女風の事、羽織陣羽織の事、生花の心得、琴と琵琶、諸藝の變化●下女の心得（三）、遊女四季花の見立、美人譜、婦人束髪の雛形并説明書附圖、女の戒數件、人に物をおくる心得、鷄の歌、葱を喰た口の臭を去る法、子の字の答、長き夜の歌の問●諸廣告

九月廿五日

明治十八年間　女學雜誌發兌日表

七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
廿日	十日	十日	十日	十日	十日
	二十五日	二十五日	二十五日	二十五日	二十五日

廣告正價表

一行一回掲出	但廿三字詰	前金五錢
同三回以上	同	同一割引
同六回以上	同	同二割引

報告

當分毎月二回の發行と定むると雖とも事業の整頓するに隨ひ漸次回數を増加して毎週一回の發行とすべし●本誌は必ず前金を要するを以て御注文の節は代價郵税共御送付を乞ふ●郵便切手代用は堅く御斷り申上候但し不得已者に限り郵錢切手一割増にて申受候●爲替は東京芝區新橋郵便局へ向け御振込被下其爲替券を樂堂に御送付可被下候●詩文和歌發句等の原稿御投寄の節は作者の國郡町村姓名等明細に御記入可被下候

女學雜誌代價郵税表

一冊	正價四錢	郵税一錢	合計　現金五錢
十冊	同卅八錢	同十錢	合計　前金四拾八錢
廿冊	同七拾錢	同廿錢	合計　前金九拾錢
卅冊	同壹圓	同卅錢	合計　前金壹圓卅錢

但し毎號拾冊以上づゝ取纏めて御購求被下候方へは賣捌所同樣特別割引可仕候

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第五號（明治十八年九月廿五日）

●宮内省達　華族一般

今般四ッ谷區四ッ谷仲町皇宮附屬地内へ華族女學校を設置し當省所轄に相定め候條此旨相達し候事

明治十八年九月五日　宮内卿伯爵伊藤博文

●宮内省達　華族一般

學習院規則中女子敎科相廢し候條此旨相達候事

明治十八年九月五日　宮内卿伯爵伊藤博文

●宮内省達　華族一般

華族女學校規則左の通り相定め候條此旨相達候事

明治十八年九月五日　宮内卿伯爵伊藤博文

華族女學校規則

第一章　通則　第一條　本校ハ　皇后宮の令旨に依りて建設し宮内省の所轄とす●第二條　本校に入學の生徒ハ華族の女子にして年齢六年以上滿十八年以下に在る體質健全の者たるべし但し本校の都合に依り士族平民の女子と雖ども入校を許すことあるべし●第三條　本校の敎旨ハ彝倫を本とし女子に適當したる學術技藝を敎授するに在り

第二章　敎科　第一條　本校の敎科を大分して小學科中學科の二種とす●第二條　小學科を又分ちて下等小學上等小學の二等とし毎學科を更に三學級に小分す●第三條　中學科を亦又分ちて初等中學高等中學の二等とし毎等科を更に三學級に小分す●第四條　小學科生徒の相當年齢ハ滿六年以上滿十二年以下とす故に修學年間總て六ヶ年にして毎等科各三ヶ年毎級各一ヶ年とす●第五條　中學科生徒の相當年齢ハ滿十二年以上滿十八年以下とす故に其修學ハ亦總て六ヶ年間にして毎等科各三ヶ年毎級各一ヶ年とす●第六條　小學科程ハ初等敎育を完具し且中學科の豫習をなす者とす

（以下次出）

○婦人の地位（下）

前章に述ぶる如くにして今ま據る所の確義なしと云ハゞ如何にして婦人の地位を定むべきや抑も婦人は

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

如何なる有樣に在らんこと至當にして且つ之を如何樣に取扱ふを以て當然とすべきや吾人思ふに夫は妻を愛すべし妻は夫を敬すべし夫は外を理むべし妻は內を守るべし夫妻は天權を均ふして而も世に在りては妻たるもの夫の保護を受けて之に副ふべし是れ適當の事ならむと

之を生理の上より云ふも亦た社會の上より考ふるも如此く定るを以て尤も公平にして且つ安全なる義理と思はるゝ譯あり先づ生理の上に付て云ふに凡そ万物の中に生あるものは皆な男と女と即ち雄と雌との二ッより成ることなるに皆な雌は保守の性質を有ちて雄は進取の性質を存せり此れ諸生理學者の古來に承知せる所ろにして近年ブルックス氏の新論ありたる后ちは更に確實なる理論とはなれり然れば人間に亦た此の規則を免るゝ能はずして女は常に保守にまさり男は大抵進取に長せり然れば物に感ずること心を推し計ること思ひやりの事愛慕の事なんどは女の長ぜる所にして物事に感動されぬこと事物を判斷すること思ひきりの事辛棒の事なんどは男の優る所なり此れ決して數百千年來の習慣に由りて如此く性質を進ましめたるの故のみに非ずその身体の造構よりして考ふるときは到底かゝる相違を來すべしと云ふこと定論あり然れば女に外事を托して男に內事を委ねんとは尤も利なきことなり然ればとて男と女と共に外事に奔走せんには內に損多し此れ其の職を分つべき理にして亦た其一を他の保護に委し且つ之をして彼に副はしめんと云ふも亦た此の譯あり

社會の上より云ふも女は保守し男は進取すること尤も利益多し凡そ世の中の万物を見るに草木の組織動物の結構より天下の形勢國家の情体まで皆な保守と進取との二ッより成らざるはなし一方に舊きを保ち守るの性質あれぞこそ亦た之に對して進み取らんと

の性質も起るなるべし且つ此の兩方ありてこそ過ぐるなく及ばざるなくよく中庸を得て眞正の進歩を爲すとならん男女の一家を理めて世の波を渡るや亦た實に然り若し兩方に於て各此の性質を一ツ宛に具ふるなくんば十分の家計は立つまじきなり若し一人にして此を兼ね備えたらばと思ふ人もあらんなれど然る者は所云る聖人にして不完全の人類には稀れなると也況してや男女かく反對の性質を備えてこそ互みの愛は深く互ひの信は増すものなれば此れ人情の常にして造化の分配妙なりと知るべき也

女は保守にして男は進取なりと云ふ而して進取の保守にまされりと云へる理由はこれあるなく二者の共に入要なるは表と裏と内と外との如き關係にして何れを劣れりとは云ふ可らずとは云へ若し一家を爲すと云ふの上よりして考ふるときは勢ひ主權てふ者を一点に定めざる可らず於此乎裏は表に副ひ内は外に從ふの理に由りて女は男に從ふべき事となるなり然ればとて無理の事壓制の事みな悉く男に從ふべしとの譯は勿論あるまじき義なれども平常家内の關係に於ては男を主とし女を副とし女は男の保護をうけ女は男を扶助せると云へる覺悟にて世を送るべしとは云ふなり此れ至當の事なるのみならで斯ありてこそ一家は平和に治まり家内は親睦に交はりて此世に在らん限り「ハッピー、ホーム」(幸なる家族)を得て樂み極まりなかるべき也

此故に婦人の有樣を進めて之に權力を與へんとする今の婦女論者はよく〳〵此の理由と思ひて婦人の地位は到底男子の副助たるべき者とまでになすべきとと覺悟しいろ〳〵の改良策を執らるべし今の婦女は男子の下婢なり吾人は此れより之を進めて男子の助け手相談相手と爲さんとす今の婦女は男子の壓制束縛を受けて何事にも之に屈從すべき有樣となれり吾

人ハ此れより之を進めてたゞ男子の保護を受くべき者男子ニ副て進むべき者とあらしめんとす今の婦女ハ只だ何事ニも世より離れて全く國民たる義務を盡さゞして可なるものと思へり吾人は之をして其の内を治るを本務とするの外ニ亦た外事ニつとめて一國民たるの務を爲すべきことを猶ほかの男子が外事を行ひて國民たるの務を爲すの外ニ亦た其の家内の事を省みるが如きの有様ニ至らしめんとそ以上吾人の切望する所ニして社會を如此きに至らしめんとを以て吾人の責任と覺悟せり希くハ四方の婦女諸君今の機を幸ひとして妄りに貞温優和の女徳を輕ろんじ其の實ニ進むまじき地位にまで暴進して反て世を害し家を破るの愚を爲し玉ふ可らず凡そ物事の弊ハ一方より他方へ偏走するに在れバ從來壓制を司としたる輿論が今の如く婦女を優待するとゝならバ此れよりして婦女を非常に氣儘ならしむるとゝもならんかと心配して本誌發刊の初めに當り先づ婦人の地位を論述し少か吾人の素論を明にすると如此矣

本論はたゞ平易を主として且つ惣体の概論を爲したる者なれバ理解の粗雜なるハ實ニ免れがたきとあり他日別ニ細論して此篇の理由を明瞭ならしめんとを期そと云ふ

巖本善治

●束髪の傳習　婦人束髪會にては何人に限らず束髪の仕方を知りたき者あらば京橋區彌左衛門町七番地經濟雜誌社内の植月甲一郎氏と麹町區平川町三丁目一番地渡邊鼎氏の両所にて毎日曜日に敎授さるる由尤も右傳習望みの者は前土曜日迄に其旨を云送り日曜日は午前十時迄に行くべし

●御聖胎帯　深川富岡八幡の司官富岡有永下谷區中徒士町二丁目玉生六郎の兩名ハ有志者五百有余名の總代となり本所南二葉町十一番地へ神功皇后の御聖胎ニ着られたる麻布(俗に云ふ胎帯)を神體となし一

社殿を設立し御裳神社と稱し諸人に參詣を許し度き旨を昨日其筋へ願ひ出たり〔本年九月十三日繪入自由新聞〕

●殊勝な心掛　父子相欺ひて兄弟墻に鬩ぐと云ふ今時の人情には實に得がたき奇特な話し府下荏原郡八幡村四百四十四番地の峯岸おやつ(四十三)と云ハ未だ年若の頃に近村の某甲方へ緣付きし事ありしが據處なき事情の起りて不緣となり實家へ歸りし後は女髮結となり兄何右衛門(五十五)の手助けを爲し一人の老母に侍き居たるが兩三年前より兄の何右衛門は多病の身となり碌々稼ぎも成らざれバおやつは獨り精悍しく朝な疾より起出で得意の家を駈回り僅かに得たる賃錢にて一家の活計を立て居るさへ最感ずべき擧動あるにおやつは性來世にも珍らしき孝行者ゆゑ只管老母と兄の氣を損せぬやうにと心を配り又隣り近所の交際も唯誠實を旨とすれバ誰とておやつを譽ぬ者とてはなく殊に同人は未だ年老しと云ふにもあらねバ知己の者より頻りに緣談の事を勸むれどおやつハ一切承諾ず若し妾が他へ緣付く時ハ老母と兄の世話をする者なきゆゑ忽地不自由を掛るハ知れたことゝ之を知りつゝ緣付くときは此上もなき不孝なれバと斷然言切つて少しも應ずるの色なくますゝ孝養を盡し居るとは亦得がたき女節婦なり

〔本年九月十八日改進新聞〕

●婦人の衣服　婦人結髮を改良して西洋束髮風に眞似る說起り既に實行せるものもあるが就ては其の服も改めざる可らず束髮と頭だけハ開化しても衣服がダラゝゝせし借衣の出來損ひに丸い厚い帶を占め其の結目など宛ながら行者の御帷子を異樣に背負ひし如くにてハ甚だ不釣合とも何とも申し樣なき見苦しき結髮男子なして洋服を着るも五十步百步の論なれと又一說にハ斯く斷行せんこと容易ならず勿論後日までとならバ可成西洋風に似せ帶も廢すべく輕便なる

を用ふべしと雖ども差當りて之を行ふと難儀あらバ是れ以て是非に及ばず先づ今迄のまゝとして改良を永遠に期するとし止だ頭髪だけ改良したし併し斯くては見苦るしとあれど實際ハ然らず目に馴れぬ當座ハ格別目に馴るゝかゝにハ今の男子ハ佛蘭西とか米利堅とかの開化頭に相變らず頭陀袋の如き日本服を穿ちても左程醜からず却つてチヨン髷より美しきと同樣ならんと鏡に掛けて見るが如し何ハ兎もあれ婦人の衣服にハ左して故障を入るべき所なけれど爰に一ツの話しありと申すハ外ならず餘り贅澤に過ぎんかとの一條是れあり而して此の弊ハ最も田舍に多きに似たり例へバ田舍人の細君娘などハ平生服一寸服より祭禮の時の著物。花見の著物。神詣での著物。祝言の時の著物。葬禮の著物。法會の著物と凡そ少くも十通り位ハ持たざるなく孰れも金目がゝりて紋付一枚何十圓。帶一筋百數十圓などコテ〳〵しる上品にて先づ之を並らべたらば小大概の呉服店とも思ハるゝ程にて取分け豪家の子女などハ婚禮の折衣服凡そ幾十棹などゝ總て多きに誇るとなれど其の癖平生の著類ハと云へバ案外麁末のものにて質素を主とし容易よきものを著ず甚しきハ生涯の間一二度着しのみにて跡ハ簞笥葛籠の底へ深く秘め置くとあり至極贅澤と云ふべし成程金さへあらば如何に贅澤するも差支なしと雖ども日本の如き貧乏の國に生れ取分け無智文盲人並々のとさへ出來ぬ器械同樣の婦人にて斯く金目多きものを所持するハ第一不權衡の至り國の損と申すべし試みに日本國中婦人がありてもなくても宜しき無益の著物を金に替へ之を用ひなバ澤山の兵士を養ひ多くの軍艦をも造らるべし尤も婦人達にて其の衣服を仕舞置かず常住不斷之れを著なバ文明世界金持の豪奢を衒ふに似たりとて聊か恕すべき所あれど去りとて其のともなく不經濟と申さんか客

商坊と申さんか言語同斷の仕末あり然るに東京邊の婦女は左程澤山の著物を持ちも有れバ有合として平生にも之を着るが故に其の美しさと田舎婦人と月鼈の相違あり去れば着物を持さぬとハ中々田舎婦人に比すべくもあらず若し能々の美服を要するときは中等位のものすら先づ損料借りにて立派に事を濟すなど兎角發明に立廻るとあり斯くしてこそ餘計に仕舞置くものもなく至極開化風にも適するとならん學者ハ守錢奴が金を働らかさず大切に仕舞置くを以て不經濟此の上なしと云へど田舎婦人の衣服を仕舞置くとハ寧ろ守錢奴より甚しきものなり何卒早く此等の弊を改めて豪奢質素孰れか一ッを撰び今まで通り贅澤至極に澤山の衣裳を仕舞置かぬこそ願ハしけれ

（本年八月卅日越佐毎日新聞）

○曉鶯　東京飯田街　滝きよ

有明の月ハ霞とありゆきて
曉つぐる鶯の聲

○惜春　東京　町田讓

ちる花の流れてとやく行春を
まてしとゞめんまがらみもがな

○常盤御前　遠州濱松　花柳女史

常盤なる松の操のふかみどり
うつらぬ色の幾代さかゆる

○女學雜誌をよめる　磐城　蘆野明日香

女郎花いかに嬉しく思ふらん
めぐみの露の袖に餘れバ

○千鳥　近江　伊藤とめ女

日溜りや千鳥見て居る舟の猫

○霜　東京　山内仲子

霜詫て鳴や夜汐のさすれ貝

○江上晩望　神田錦町　潮田たの女（滿十四年）

十里長江澹不流。布帆二両似浮鷗。前山時見嬋娟月。

一陣清風涼似秋。

評　清爽可掬

○客舍思故郷　　埼玉縣川口　岩田伊代子

愁夢醒來月影移。數聲歸雁斷腸時。情懷多少誰俱語。一穗殘燈紬似絲。

評　愁夢爲悲雁所破。情懷可想。

○梅香女史の傳　　月の舍主人　錄

第四　木々の梢の六の花
　　　言の葉末の心の玉

都にてめづらしく見る初雪のあゝち芳野の山げしき今はた如何に裝ふらん朝を小春と思はせたる空だのめてふ夕べには銀河の砂地に張り鵝毛の片空に散亂し人は鶴氅を衣るの暇なくしてあはてゝ徘徊し月は庾公の樓なきあたりに能く千里の都地を照らそ實に万々兩の價値あり」さても梅は其日の午后叔父の許を得て根岸なる松本孝の家を訪ひ母なる人にも面會してさまざまの物語し時の過るを思はぬ間に朝よりの天げしき驟かに變りて六出の花あちこちに散りかゝりけるを初は初雪の興に入りて三十一文字の樂もありけんに次第々々にふりつもるけはひに心いそがれてまだ暮れきらぬたそがれ頃ろ辭ひて獨り立ち出でつ借りたる傘は身を覆ふためとは云へど風流女の花の衣にとさならぬ梅の蕾を咲かすとや故意に斜のさしかゝり忍ばぞ池の頭に來たりぬ此時日は全く暮れて西山尙ほ殘りの光なきに凍りて照れる明月は雪に光を添ふるらん夜の景色の新らしく研き出でたる風情あり凡そ初て都地に上りし頃ろは活潑の少年才子も尙は大抵古郷の事の思はれて用なき便をあまたゝび文して送る覺あり況して妙齡の佳人にして父は當今行衛知れぞ母は鄉里の親戚がり僅に身を寄せ住まふなるを古里さむく衣うつ雪の景色を見るからに如何でか無限の感なからん梅はつくづく思ひまび

しきりに氣鬱に見えけるが元來活潑の性質にして丈夫も及ばぬ心あり特には廢家の跡を起す責一身にふりかゝるゆゑ末までの盟あれバ氣をとりなほしつ松本に語りしことと思ひ起し慨然としてたちとゞまり遥かに眩むる醫學校の高塔を空に見やりツヽ。嗚呼あゝ歎かはしき世の中かな神の人間を世に生じ万物の長として育て玉ふに男女のわかちは備るとも是れ陰陽牝牡の理にて素と止を得ざる事なれバ何とて其間にかく斗り今の世に見る差別あらんや女なりとて亦た人なり万物の靈と生れし上は鳥や獸に劣るべき責は毛頭あるまじきに生きて此世に在らん限り何事にまれ男子の下に立ち壓制に從ひて卑屈なるを是れ女の貞と云ひ無理の命にもさからはで不善を爲をを操と云ひ起き出でゝより寢ぬる迄ではしたなく追ひ仕はれて婢とあり理もなきことに打ちたゝかれ譯も分らで罵り懲らされ男子は不品行不行跡して是れ其の働あることとし女は少しの樂だも尙は増長の端なりとて僅かの事にも責められて故なきことに追出され助け輔けて仕上げたる富も身代も身に付かず一錢一物の分配なくして生命を冥加に追ひ歸され歸れバ其身のふつゝかとわびるは父母の手前のみか世の人々まで嘲けり笑ふ又た讀書の藝ありとも之を收めて用うる途なく少しく口に出しなバ過たる女とたしなむる世の男子等は一物なき身にも口には山川の大言のべてはぢぬべし女の才は家を破るとそしるは男子の自らが愚なりとは心付かで無知なるを以て女の德とし生みたる子供は母を見てたな賃拂はぬ假宿とし人となりては高ぶりおごり分らぬ老母は女なればと我子にまでも卑しまれ三枝の禮をしる鳩にも及ばぬ牝鳥かばふ鷄だも尙は男子にはまさるらん而るを今の婦女社會は之をくやしみて奮發する有爲の婦女は少からずと思ひしとは空だのめにて我國一の學校すら尙

は男子の愛を受て之になび仕へんとのみを望とする人々多し況して其他の女子等は如何で改革の志ならん妾愚かなれど初より立てし望は我家の再興のとのみに非ずぞ日本全國の婦女姉妹をかゝる哀の境界より救ひ出して千早振る神のまことの御心に適ふ男女の平等互愛を我が全國に行はらせで置かんやれたゞ共々に盡力すべきハ學校生徒の其中に松本さんの一人のみされど彼方も學あれど其志は猶は卑し今日も今日とて男女をば妾ハ同權なりと云ひ彼方は之を然らぞとの玉ひし言の理は一應きこゆる所もあれど亦た是れ古來の夢なるのみ學者の仲間にきこえたる某の説も同權と見えしはまことの文明に心なきたる論ならめまた彼の。アーモン嬢樣で御座いますか何を一人で御考あそばしますも先刻松本樣へ御迎にまいりましたればたつた今ま御歸りとのことソレにいたしましても廣小路より山下を通つて參りましたにどうして御目にかゝりませんと思ひまして只今はわざと此方へ逸て御池のほとりを歸りましたが御目にかゝりまして御うれしう存じますサ御家でも御まちどうで居らつしやいませう雪も少し途止ましたイザ御歸り遊ばしませと云ふは迎の下女菊なり

○秋夕　　明治女學校の　百合香

此の今様は前号に報道したる明治女學校の某にて百合香と号り玉ふある文人の新作なり我國人はかゝる体を用ひてなぞ思ふさま〳〵のこゝろをも皆なよく寫し出し得なん此れよりは唐詩漢文など悉く廢してかゝる体を用ひよとは經濟雜誌局の某學士が言ふのみにあらで吾人もいたく賛成する所ろなりける

「うき世のちりは　へだてねど
こまも車も　おとづれぬ
苔のかよひ路　世ばなれて

柴の戸ぼそゞ　住よかる
「松ふくあらし　竹の雨
友なき宿を　なぐさめて
天津乙めや　かきならす
琴のしらべと　きこゆなり
「軒ばにかくる　さゝかにの
糸につらぬく　しら露は
雲ゐの月に　てりそへて
玉のすだれと　みえにけり
「草の根ごとに　夜もすがら
はたをり蟲の　こゑたかし
ちくさのはなを　あやなして
わすれおりてん　からにしき
「物思ふ身は　ねもやらず
桐の木陰に　坐をしめて
萬有物を　ながむれば
造化の妙ぞ　しられける
「かくおもしろき　秋の夜も
ころもかたしき　獨りぬる
よれうきものと　かこちつゝ
なぐさめかぬる　人もあり
「しばしほのめく　稲妻の
きえてあとなき　よの中を
おもひわびつゝ　夕やみに
まどひわたるぞ　あはれなる

○本邦の文

本邦の文も上代のは調も優に自らたけ高くして學びても學びがたきほどなるは祝詞古事記などを見てしるべしたゞ延喜の御代の頃ろ紀貫之ぬしぞよく學び得られたりけるされバいまの文學ぶ人は紀氏をこそ文章の祖ともたふとぶべけれ紀氏が文の中には上代のふみよりうつし來れりと思ふやうのこともあまたあ

るが中に土佐日記の住吉の浦の段に「てげどもてげどもあまりへあそきにあそきて」云々などいへる語勢は祝詞の文より全くうつし來れることあきらけしさて此御代よりしてつぎ／＼源順紫式部清少納言を始めその他の人々の文も大かたは高き調なるをそれよりいやくだりにくだりきて南北朝の比よりぞやうやういやしきかきざまにはありけるさま／＼其文を見れバからざまの對句などくさ／＼ならべ枕詞などかづ／＼加へてくだ／＼しきかきざまになりゆきされどそを一變せんとて縣居大人鈴屋大人などのつとめて古へぶりにかき出給ひつれバ大かた縣居大人の文には古代めきていとめでたきも多かるを鈴屋大人は彼の對句などの漢文めきたるをいたくきらひ賜ひしからばあまりなだらかにすぎたるやうなれど云々（文話）

○内外の混語

本邦は語言中外國語の混ざる者少からず今其の一二を擧ぐれバ杏子をアンヅウ天秤をテンビン强盜をガンダウ刮剩をクワツン滑碌をコロコロと云ふ如き皆唐音なり又た胡乱をウロンと云は唐音ウ、ロンの訛也亭のチンはテンの訛小兒の游戯をワルサと云ふは頑要の訛なり又た尼をアマ子規をホトヽギス猿をマシラ水をアカハと云皆な印度語なり虎をトラ梅をウメ豆豉をシソと云皆な韓語なり今日のマンテル、チヨツキ、シヤツ又はステツキ、ドロンケン、ドンタクの類も百年の末は内外を別ちがたきに至るなるべし

○詩歌を詠ずる容易ならず

山谷が詩は閉門覓句陳無己對客揮毫秦少游と陳無己は人にあはず門を閉ぢて句を案し秦少游は人に對して筆を揮ふ歌よみにも西行は縁引導してうそふきて詠み和泉式部は引かつぎてよみけるとかや又たそれの時はふところに顔さし入れてよめりとも云へり又

た道綱の母は暗き所にてよみならハれしなや燈を背けて目を閉ぢ案じけるとなん

○古今女風の事

むかしハ女の小そで模樣十五六才の女ハその頃のもやう廿四五ばかりの女ハその年相應のもやう四五十才の女ハその年ぐらゐのもやう五十以上六十ばかりの女ハ後家むきとてそのとし位の模樣を着しあるくにも其とし位の樣子にあゆミ帶の恰好も其年相應のもやうにするゆゑ五人十人つれ立てあるくを見るに小そでの模樣帶の樣子ありき樣にて老若中年ハ皃を見ずして分りしが近年ハ十四五才のもやうも十七八ばかりのものも三十四十の女も老若も皆な郡内縞あるひハ八丈縞丹後じまさもなくハ紋付ものさてハ無地小袖錦帶ハとゞ廣をミなむびな高に丈り長〳〵と出しあゆみやうハとた〳〵と牛のやうな身品もなくあるく故老若中年皆な一樣に見ゆこれハ女ながらも器量なくみな人まねをする故なり小袖の紋付無地しま類のもやうハミな遊女の直似なりむかしハ常の女縫箔の光る小そでを着る故遊女ハ無地もの縞の類を着てつねの女と風かハるべきためなり帶も常の女の帶ハはゞせまき故遊女ハたゞ廣の帶をして是もかはるべきためなりしな今ハ常の女遊女の直似して無地もの縞の類の小そで幅廣の帶となりしハみな是人眞似する器量のなき故なり(古老物語)

○羽織陣羽織の事

世俗貴賤の差別なく羽織と稱するものを着す園大曆を案ずるに承久の兵乱の後公卿大ふ窮し賜ひ衣服調度心意に任られざ勿論車馬いよ〳〵不隨意にて衣冠束帶の御方も歩行し賜へどそれの服に塵埃の祟らんことといとひ賜ひて衣冠などの上へ明夜などの服を上張歩行し賜ふ故に道服と云その上張のつまの地に引くを折てとさみ賜ふ故服折と稱す服ハ身に服する總

名あり呉服をくれもといふも禽の羽翼をもと訓ずるもとな身に被るもの丶稱あり羽二重といふも御召絹の念を入て恒の絹を二重合せ織しでとき絹といふ稱よて服二重あり獻上に八反掛の名あるが如し端折羽○織の諸説多かれど信用しがたし誠に古しへ狩衣素袍ばかり召されて奴袴ぞゝまの類召されざりしと褻よあることなり故に一向宗拜禮へゆく衣ばかり懸るも褻の故實殘りたり去かるに等持院尊氏公服折に袴を著ずることを初め賜ひしが拜膳のとき服折を去りしより終に袴ばかり著する樣に變せりとぞ一向門徒と辻打放下の囃子うたのみなる衣ぞのりを著せりまた陣羽織と云ものは道服の意とは異なりこれは具足のれぞしを敵に去られまじき爲に設しものとかなまる民間に袖なし服折を甚兵衛ばをりと云陣兵ぞをりの轉せしとなり(東牖子)

○生花の心得

春の花は發生の姿なり賑に生けべし夏の花は繁茂の姿なり盛に生けべし秋の花は半枯の姿なりまづめて生けべし冬の花は極陰の姿なり淋しく生けべし浚夏は陽中に陰あり季冬には陰中に陽あり春は花に神あり夏は葉に神あり秋は實に神あり冬は枝に神あり皆あ天地自然の理備はるなり時節の心得最も肝要なりと知るべし

花といふは何にても賞美の言葉なり花嫁花の香抔にて察し玉ふべし故に柳に水仙金雀に椿其余二種の取合を挿とも花ある物を前に見るやうに生けなすべし擧る人も根〆の花を賞して木物を次に見る心得ありたし數瓶並べ生けたる會席抔には花物の插出る前後を大概准に並べ葉物は雑物なれば末席に置くと心得べし

野自然生の花枝は力あくして自由ならず市店に扱ふ花は蕫太く花首よし然れども枝もろくして嬌悪し常

に手練して矯習ふべし

○琴と琵琶

琴は唐土にて神農といふ聖人つくりはじめたまふなり日本にては天のうずめの命はじめたまふ○琴と三味線との調子をあはすると　琴の三の糸三味線の一琴の五は三味線の三とおなじ　二あがりの調子は琴の三三味線の一琴の八三味線の二琴の十三味線の三とおなじとあり○糸のおさへやう　大指にさしたる爪を前の爪といひ中指にさしたる爪を向ふ爪といひ人さし指にさしたる爪をわき爪といふ○糸の名手まへを巾といひ次を爲といひ其次を斗といふ其れより次第十九八七六五四三二一なりおさゆる糸は四七八九ありひきならひにはおさへずしてもくるしからず地のきれに墨つけおくべし

琵琶は長さ三尺五寸四すぢ下よりさかさまにひくを琵といひ上より順にひくを琶といふ天竺のはしゆりん王の代にきぶといふもの作りたりとかや

○諸藝の變化

神樂が田樂となりまた歌舞妓となりし如く俳偕なども蕉風一變して江戸座となり起逸が六玉川体の句となりまた一變して川柳となり謡も淨瑠理となり豐後節が新内となり說經が祭文となり本歌が狂歌となり明和八九年の比初めて潮來節といへる者江戸に流行せしが今は五色いたで二上り三下りいたでトッチリトンど〻一など〻變はれり

○下女の心得　（三）

下女最初の願ひには奉公に出てよくつとめ主人の氣に入り立身出世して衣服も澤山にこしらへ相應の所へ緣付んとおもひての奉公なりそはじめ母親のいひわたすには奉公にいづるからはいかやうの主人につかはるゝやおれず朝もとくおき夜も遲く寐るものとてゝろがくべし女は第一尻輕にして主人にくちおさへ

せず仮にも朋輩と主人れとかげぐちいはゞ朋輩とて油断すべからず主人へ告口するものと心得べし年たけなば必ず〱旦那のそばちかくよらぬやうにしとかく人にそねまれぬやう物事つゝしみ大切に勤むべしといひいだすとき娘も其氣になつてとくして母の教のとほりにせんとおもひしはこれ最初の願ひなりさて奉公に出ても只始めのうちは何事も愼み心につといに勤るゆゑに主人も朋輩も心よくもてはやすなつけてそろ〱と口をきゝ出しおなじ不奉公仲間のかげぐちにのりてあしざまに主人を罵りつひにはおのれの身のさまたげとなりて立身出世することなし最初の願ひには何とぞよく奉公して衣類をも拵へ出世もせんと思ひしもなればその出世をするやうにつとむべきことを不奉公するはもとじめの望を忘れたるなりこゝをもつて只人は發端の志をひるがへさずして一圖にまもるべきことなり歌に　山ざしのこゝろをもちてつとめなばつひには主にめぐまれぞせん

以上姑と娵と下女と三ッの品はありといへ共みな是そのこゝろより善悪の相はあらはるゝことなりされども人是に心をよくることなくして家を乱し身を害ふことになりゆくことをしらざるなりつゝしむべし〱

○遊女の心ばへ四季の花になぞらへて

せきやは　女郎花

此花の心ばへは只柔和にして情け深し誠の女也遍照や頼風を思ひくらべて知るべし

明石は　萩の花

此花は和らかにきれいなり伏猪の鼻息にもなたこなたへなびき遊ぶけしきいうにくまんとする共せんかたなかるべし

桐壺は　花すゝき

此花の心ばへはこしかた行末の事もさのみ思はず其日の風其夜の嵐になびき色穂に顯れて人を招きよろ

こバしむる事すめやかなり

滿汐ハ　菊

歌うらは　水仙

此花の心ばへハいたづらにさわぎのゝしる事をこのまず咲出る名香千變万化俗よこれをそこ色といふ

此花ハ他にこびへつらふ色かもなく雪の中をすらりと咲出たる姿大丈夫の行跡なり　（をハり）

〇美人譜　　秀水徐震秋濤

一之容。　螓首　杏唇　犀齒　酥乳　遠山眉　秋波　芙蓉臉　雲髩　玉筍　荑指　楊柳腰　步步蓮　不肥不瘦長短適宜

二之韻。　簾內影　蒼苔履迹　倚欄待月　斜抱雲和　歌餘舞倦時　嫣然巧笑　臨去秋波一轉

三之技。　彈琴　吟詩　圍棋　寫畫　蹴鞠　臨池摹帖　刺繡　織錦　吹簫　抹牌　秋韆　深諳音律　雙陸

四之事。　護蘭　煎茶　金盆弄月　焚香　咏絮　春曉　看花　撲蝶　裁剪　調和五味　染紅指甲　鬪草　教鸚鵡念詩

五之居。　金屋　玉樓　珠簾　雲母屏　象牙牀　芙蓉帳　翠幃

六之候。　金谷花開　畫船明月　雪映珠簾　玳筵銀燭　夕陽芳草　雨打芭蕉

七之飾。　珠衫　綃帔　八幅繡裙　鳳頭鞋　犀簪　辟寒釵　玉珮　鴛鴦帶　明璫　翠翹　金鳳凰　錦襪

八之助。　象梳　菱花　玉鏡臺　兔穎　錦箋　端硯　綠綺琴　玉簫　紈扇　名花　毛詩　玉臺香奩諸集　韻書　俊婢　金爐　古瓶　玉合　異香

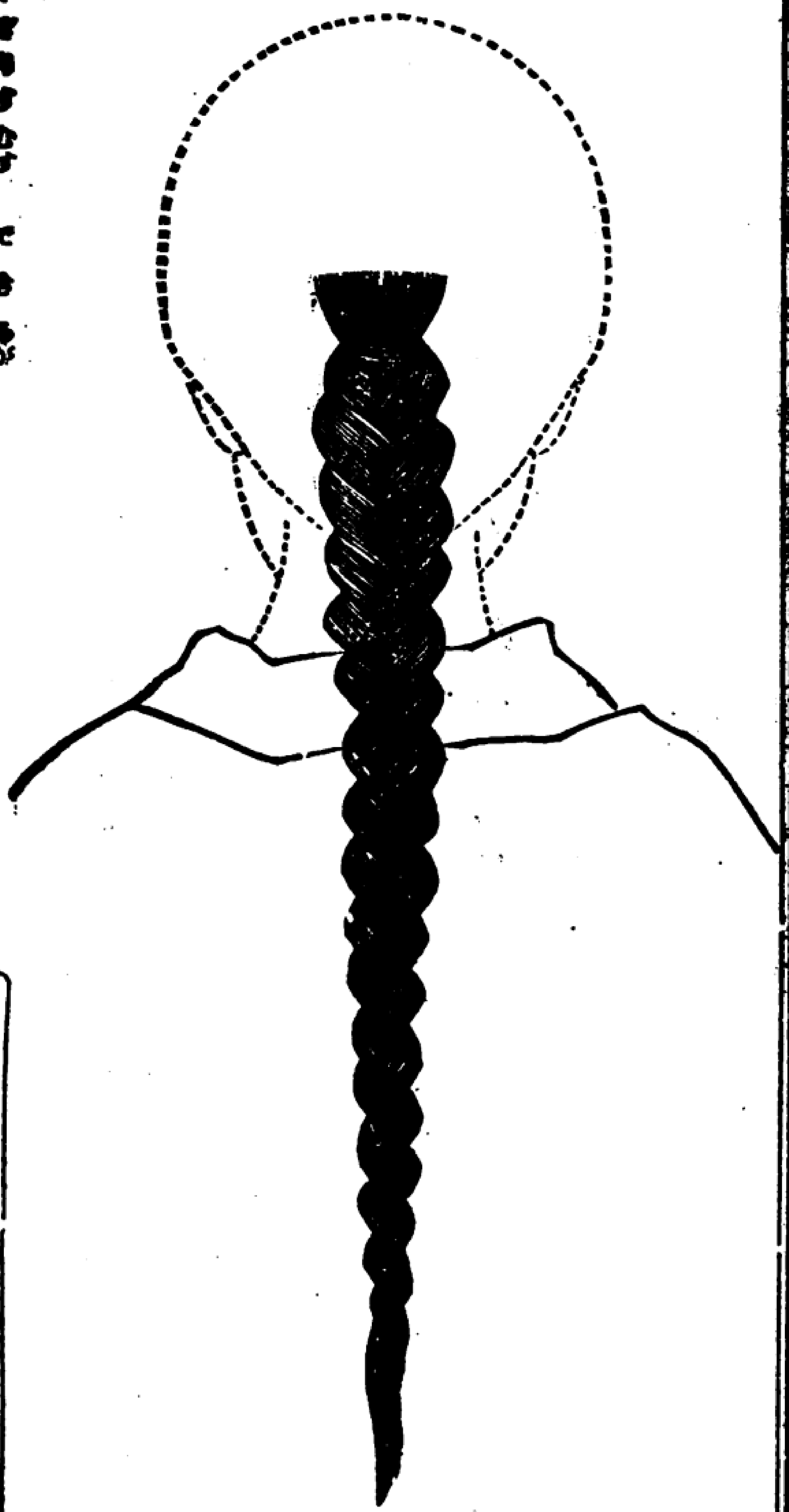
九之饌。　各色時果　鮮荔枝　魚鮓　羊羔　美醞　山珍海味　松蘿徑山陽羨佳茗　各色巧製小菜

十之趣。　醉倚郎肩　蘭湯晝沐　枕邊嬌笑　眼色偷傳　拈彈打鶯　微含醋意

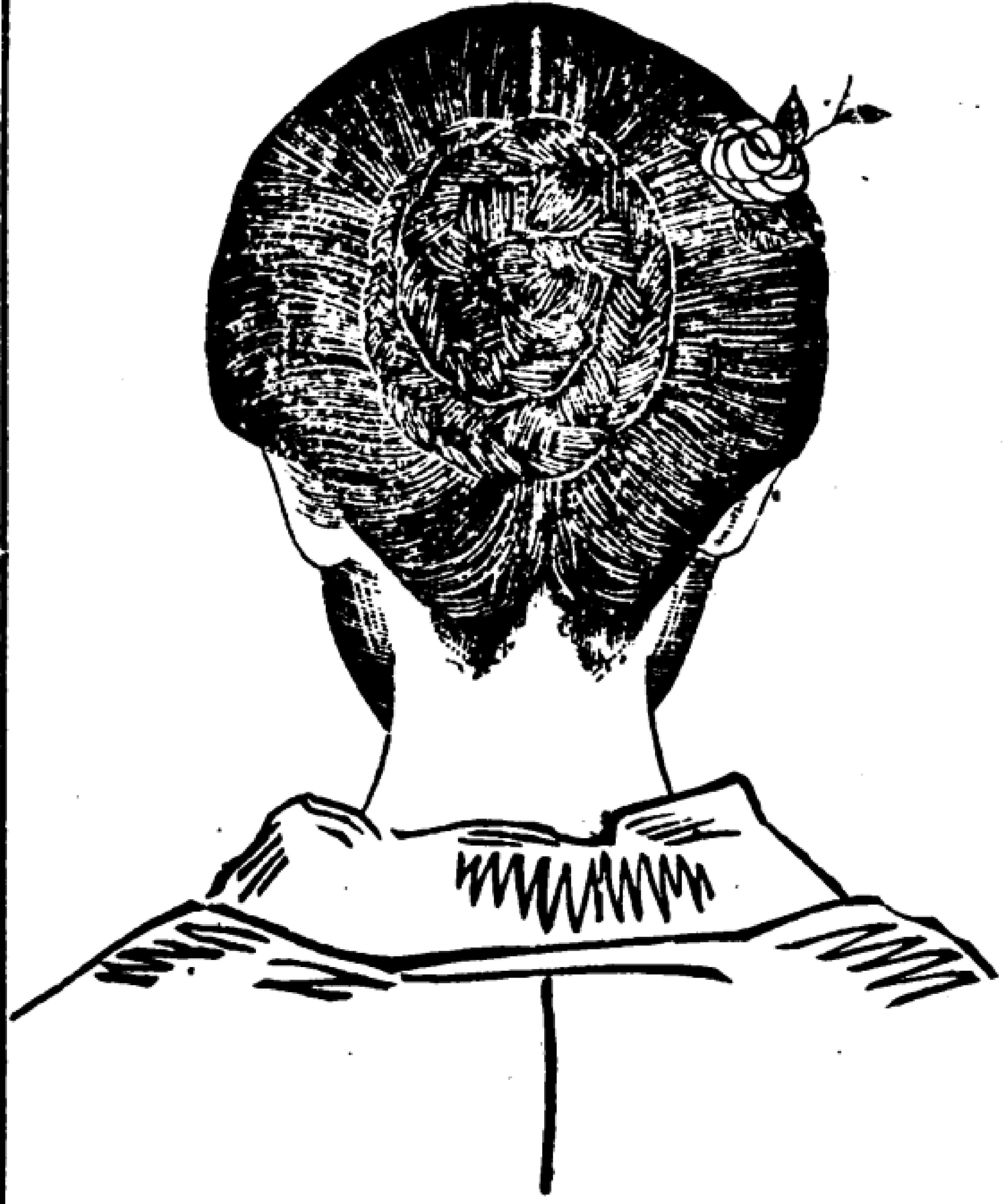
〇婦人束髪の雛形幷説明書（前号の接き）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第四圖



第五圖



伊吉利結び出來上り

伊吉利結び（下さ結び）

（結び方説明）先づ中剃の邊にて髮の毛を束ね集め夫れを三つに分ち第四圖に示す如く三ッ打に編み（但成る可く堅く編まぬ方宜し）然る後ち第五圖の如く適當の曲毛を作りて所々を留め針にて押へ留むるなり○此結び方は最も丈夫なるものなれば勞働をなす婦人抔には殊に適當せるものある可し

（結び方説明）先づ伊吉利結びの如く髮の毛を三ッ打に編み（編み方も上に同じ）其髮の先を「リボン」（細長き小切れなり）にて結び之を根元へ返し其「リボン」にて亦之を根元へ結び付くるなり○此結び方は西洋にては專ら十六七歳の女子間に行はるゝものなり此

年齡以下の女子ハ大抵髪を結ばずして之を背後に垂るゝものと知る可し

まがれいと

第六圖

西洋諸國に行はるゝ婦人の束髪方ハ種々にして中にハ手の入り込みしものもあれ共以上ハ其最も我國の婦人に適はしく思はるゝ二三の手輕便利なるものを撰みて掲げたり尤も本會に於てハ事務の整頓するに從ひ漸次規摸を擴張し廣く西洋各國に行はるゝ婦人頭髪の結裝衣服の裁様風致等を仔細に研究し之を世に報道して我邦婦人の取捨採擇に便す可し○以上の結ひ方ハ都て根結ひ糸を用ゆるを要せざれども之を用ゐれバ一層堅固なる可し○裏生髪毛の少なき人ハ入れ毛を用ひ附髷となすと勝れたる可し往々圖中にも示す如く髷の左右に生花若くハ花釵を挿むと可なり留め針ハ長短二種ありて一組十二本入りあり代價ハ金七八錢より拾錢位迄なり是れハ東京の重なる西洋小間物店にて鬻げり○「リボン」も西洋小間物店にあれ共是れハ舶來品の「リボン」を用ひざるも何かに適當なる小切れにて事足るべし○頭髪ハ時々清水にて洗ひ決して粘着強き膏油を塗る可からず又毎月數回雞卵の中味を取りて頭の毛に塗り温湯にて洗へバ髪の毛ハ漸次に軟美となるのみならず常に清潔にして精神亦甚だ爽快なる可し

（完）

弊堂に於て束髪の留針賣捌仕候に付き御入用の向ハ御注文下さるべし但し代價ハ一ダース（十二本入）四錢にて遠隔の御地方ハ一ダース毎に遞送郵便税貳錢を申受候

萬　春　堂

○女の戒

北越　竹田南枝

一己れの容色に誇り淫乱なる事
一物を妬み物を譏り朋友を侮蔑する事
一身に華美を盡して他人の綱目を願ふ事
一身不嗜にして汚れたる衣服を脱がざる事
一文事に耽りはてゝ顔ある事
一家政の學にうとき事
一舅姑姨夫に敬へ仕へざる事
一我實の父母兄弟にのミえたしみ他人に交際を爲さしる事
一花見芝居神詣などを好ミ出で行く事
一怠惰にして行くべき處へ行かざる事
一些細の事にも怒り腹立つ事
一召使を暴使し且其の善惡を見分くる能ハざる事
一喰物の善悪を云ふと喰物の割烹を知らざる事
一縫針の業を知らざる事
一猥りに男に文を遣す事
一衣服の流行を好み舊服を棄却する事
一朝寢をすると他人をして髮を結ばしむる事
一眞の神の道を信ぜざる事
一不經濟なると吝嗇なる事
一子の愛に溺れ子の育て方を粗末にする事
一立居ふるまひさわがしき事

○人に物をおくる心得

人に物をおくるはこゝろを用ゆべきとなりすべてあしきものを送るはおくらざるにおとりてそつうし魚のあざれ肉のやぶれ羔餌醬醢などのつくりもれ味變じ色あしく臭あしき又菓子などハまだ熟せざるもののときならずして人に害あるものみな人に送るべら

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

らずかへりて物ニよりて人の心の濃厚あらハる下部ニまかせてハうしろめたしみづからえらぶべし（家道訓）

○鰯の歌

むかし紫式部あるとき夫宣孝他出のとき鰯をあぶり喰たるを宣孝かへりみていやしきうをゝ喰ひたまふと笑ひければ　日のもとにはやらせたまふいはし水まいらぬ人ハあらじとぞ思ふ　と詠み侍りしとぞ（市井雜談）

○葱を喰たる口の臭を去る法

葱や蒜の類を喰てハ貴人の前へ出られぬのみならず嫌はれて差支る塲もあるゆゑその時は胡麻を喰るか酢を一口飲めばその臭速に去ります

●子の字の答（七）　婦人の名に何々子と子の字を附するハ是れ婦人の美稱にして姫といふか如し又男兒の郞といふニ同じ素と姫も子も漢土の姓氏にして後遂に美稱となる我國にても姫氏國と稱へし程ニて古昔より姫と稱せり子と稱するハ漢字の盛なりし頃より多く稱するニ至る尤も姫ハ高貴の人に用ひ子ハ中等に用ひしが如し然れども今ハ區別なきが如し（若宮徵古迂史）●同上の答　按ずるニ鷄肋編ニ燕山ノ倡妓皆以子爲名若香子花子之類とあり邦俗女子の名に子の字を用ひて花子貞子抔と稱するも此等に本づきしなるべし別に意義ハあるまじ（西島棵所）

●長き夜の歌の問（十五）　長き夜のとをのねふりの皆めさめ波のり舟の音の善き哉といふ歌の意義及び作者を問ふ（櫔木渡邊へん）

廣告

●中央學術雜誌　第十三号定價十錢郵稅一錢

目錄○論說○壓力之說田原榮○宗敎論（續稿）西洋天狗寄送無神迂夫批評○成典編纂論法學得業生黒八貫司○翻譯○外交機關論（接第四号）すぺんさあ、うわるぽうる著法學得業生高山圭三譯○雜錄○西洋天狗

○實物學論ノ質疑ニ答ヘ併セテ耶蘇教ヲ論ズ　半峯居士○記事○東京專門學校學術演說會田中甲子次郎君
○九月十日發兌　東京神田　團々社支店

●明治女和歌集第壹編　春夏巻上
秋冬巻中戀○雜巻下ニ分ツ
不編輯ニ従事ス江湖各娘千百玉吟ヲ賜ヘ　投稿本年十二月盡日限リ取捨添削ハ編者ノ權内ニ在リ故ニ四季戀雜ニテ少クモ二十首以上ヲ投ゼヨ　出費ヲ要セズ
●歌文評正ハ従前ノ通リ
●磐城東白川郡竹貫驛寓　蘆野明日香　弘報

●文學雜誌　十月五日初号出版●壹冊正價五錢郵稅壹錢十冊前金郵稅共五拾六錢毎月貳回發行
弊堂女學雜誌第壹号ヘ廣告仕候文學雜誌ハ八月中に其初号を發刊可仕手順の處編輯上の都合と事務上の都合に依り前記の通り期日を延し發行可仕候間尚ほ續々前金ﾆて御注文可被下候既ﾆ是迄御申込ﾐ相成候向は至急前金御拂被下度將又た見本御入用の向ハ六錢封入して御通知あらバ出來次第第一冊御送付可仕候此段廣告す
女學雜誌文學雜誌發行所
東京芝區櫻川町八番地　萬春堂

●演說討論記事論說種本　文章附滑稽小說種本　定價郵稅共五拾錢

●帝國開化用文　美本全貳冊郵稅共四拾錢

●開明捷點消息往來幷講釋　全一冊郵稅共二拾錢

●一字千金現今兒童節用　附布告新聞漢語字引　全一冊郵稅共拾五錢
右前金にて御注文可被下候　賣捌　萬春堂書房

●女學雜誌壹號貳號三版再版●
右賣切の處今回出來せり尚ホ御注文アレ　萬春堂

東京芝區西ノ久保櫻川町八番地
發行所　萬春堂
持主兼印刷人　大庭宗吉
編輯人　近藤賢三

女學雜誌賣捌所
東京神田區淡路町　巖々堂
同　神田區雉子町　團々社
同　日本橋區新葭町　良明堂
同　日本橋區馬喰町二丁目　自由堂
同　京橋區木挽町一丁目　萬字堂
同　京橋區銀座二丁目　山口福松
同　牛込區白銀町　活神堂
愛知縣名古屋本町二丁目　石版社
岐阜縣美濃國笹土居町　星菱書房
大坂北區中ノ島二丁目廿六番地　旭香舍